

惑星思考の理論的展開

Mapping the Planetary

清水美貴

Miki SHIMIZU

概 要

自然環境や社会環境を惑星の視座から捉え直すことを試みる惑星思考は、人間が地質学的脅威とされる人新世において重要な思考の枠組みである。惑星思考は比較文学者であるスピヴァクの『ある学問の死』(*Death of a Discipline* 2003) においてはじめて提唱され、その後、文学研究のみならず歴史学や哲学などの人文諸分野において理論的議論が重ねられている。それらの理論は、互いを参照しつつ、独自の理論的展開を遂げており、用語的統一もされていない。本稿では、それぞれの惑星思考の背景にある問題意識を明らかにし、それらが人間中心主義的あるいは西洋中心主義的な地球像への多様な応答であることを確認しながら、スピヴァク、ディモック、ハイザ、チャクラバルティ、ラトゥールによって提唱されている惑星思考の位相を整理する。そして、「環境危機は想像力の危機である」というゴーシュのことばを手掛かりに、惑星思考への文学的アプローチの重要性を議論する。

キーワード

惑星思考、人新世、グローバリゼーション、スピヴァク、チャクラバルティ

1. はじめに

惑星思考とは、端的に言えば、これまでの地球環境の認識とそこに住まう人間のあり方を批判的に問い直し、惑星の視座から捉え直すこと、と説明できるだろう。2000年以降に加速したこの試みは、ガヤトリ・スピヴァク (Spivak) を皮切りに、ワイ・チー・ディモック (Dimock)、ウルズラ・ハイザ (Heise)、ディベシュ・チャクラバルティ (Chakrabarty)、ブルーノ・ラトゥール (Latour) などによって理論的議論が進められてきた。これらの理論的動向を一つの系譜にまとめることは容易ではなく、そもそも用語的統一もなされていない¹⁾。その背景には、それぞれが惑星思考の枠組みを導入するに至った問題意識の相違がある。スピヴァクは比較文学研究において文化的他者への認識を改めるために、ビュエルやディモックはアメリカ合衆国という国家、あるいはアメリカ文学という枠組みを問い直すために、ラトゥールやチャクラバルティは人新世的状況において地球の概念を再定義するために、惑星思考を提唱した。こうしたさまざまな社会的、学術的、環境的諸問題を背景に議論されてきた惑星思考は、人新世における議論においては、大きな一つの問題系に集約することができるだろう。それは、グローバリゼーションへの応答である。数世紀にわたるグローバリゼーションは、社会、文化、自然環境に多元的に影響を与え、そしてさまざまな形態で問題を顕在化させてきた。グローバリゼーションの多元的影響への対抗、あるいはグローバリゼーションの反動によって高まるローカリズムへの異議申し立てというかたちで、惑星思考は提起されてきたのである。本稿では、それぞれの惑星思考の位相を理論的に整理し、そのうえで、なぜ惑星思考に文学的アプローチが不可欠なのか、その意義について考える。

2. 惑星思考の誕生

惑星思考という概念が最初に提案されたのは、スピヴァクの『ある学問の死』(Death of a Discipline 2003) においてである。スピヴァクは比較文学の見

地から、他文化や多言語の文学への研究スタンスを問い直すために惑星の視座を提示した。第三章「惑星的なあり方」(“Planetarity”) で、スピヴァクはグローバリゼーションが作り出した地球^{グローブ}のイメージを描きかえるものとして惑星を提起している。グローバリゼーションとは世界中に単一の経済的社会的システムを押し付けることであり (Spivak 72)、具体的にはヨーロッパやアメリカのシステムの地球規模の拡大であることから、地球^{グローブ}はきわめて西洋中心主義的地球像である²⁾。世界を抽象化し均一化した地球^{グローブ}像は、文化的多様性を無視したものである。比較文学研究の立場からこうした世界の認識を組み替えるために、スピヴァクは「惑星」という新たな視座を必要とした。

The globe is on our computers. No one lives there. It allows us to think that we can aim to control it. The planet is in the species of alterity, belonging to another system; and yet we inhabit it, on loan. It is not really amenable to a neat contrast with the globe. I cannot say “the planet, on the other hand.” When I invoke the planet, I think of the effort required to figure the (im) possibility of this underived intuition. (Spivak 72)

インターネット空間に存在するような抽象的な概念として示される地球^{グローブ}に対し、スピヴァクは惑星をわたしたちが住まう実質的な世界として定義している。スピヴァクの提起する惑星とは、他者に満ちた世界であり、他者に対する理解不可能性への想像力を要するものである。スピヴァクの惑星思考 (スピヴァクの場合は Planetarity という表現を用いた) は、惑星と地球^{グローブ}の不可分な関係を認めながらも、グローバリゼーションに掻き消されたこうした文化的多様性や少数派を尊重する世界像として、アメリカ中心主義の世界観に抵抗するかたちで導入された。他者に開かれた世界として惑星を想像するために、スピヴァクは、“our attempt to track planetarity as making our home *unheimlich* or uncanny” と論ずる (Spivak 74)。故郷を非故郷化すること、あるいは、慣れ親しんだものを異質なものにすることが、包括的に人間を包み込みながらも一体化することのない複数の他者が共にある世界像を示唆するスピヴァ

クの惑星思考の肝と言える (Spivak 124)。

アメリカ文学研究者、巽孝之が「惑星思考が成立するためにはスピヴァク自身に主たる活動の場を保証するアメリカ合衆国の誕生が不可欠であり、「アメリカ合衆国との逆説的関係においてしか惑星思考は生じえなかった」と指摘するように (巽 18)、スピヴァク以後の議論においても、惑星思考はアメリカ文学研究の内部においてのアメリカ合衆国という国家という概念やアメリカ的価値観の批判的見直しに接続していく。

3. 「アメリカ」を惑星思考から問い直す

ディモックは、9.11 やハリケーン・カトリーナといったアメリカ合衆国という国家の主権を揺るがすような出来事のあとにおいては、国家や国境線は表層的な概念に過ぎないことが明らかになったと指摘する (Dimock and Buell 1)。それに加えて、国家という枠組みだけでなく、アメリカ文学研究が他国文学から独立し、それらに一貫して無関心であり続けてきた点にも注目している (Dimock 3)。このような問題意識から、ディモックやビュエルは国家という概念を揺さぶる惑星的視座を文学作品から抽出し、アメリカ合衆国とは、アメリカ文学とは何かを問い直している。ビュエルは、レスリー・マーモン・シルコー (Silko) やカレン・テイ・ヤマシタ (Yamashita) といった現代作家の作品はもとより、ヘンリー・ソーロ (Thoreau) やハーマン・メルヴィル (Melville) の古典的作品を考察し、“global sense of place: the vision of a particular site understood to be a nodal point of interconnected force fields of planetary scope”や (Dimock and Buell 233)、“local cosmopolitanism”といった概念で、アメリカ文学作品に読み取れる越境的な環境観を論じている (Dimock and Buell 241)。しかしながら、こうした表現に示唆されるように、これらの議論における惑星思考は、トランスナショナルやグローバルとほぼ同義的に扱われるにとどまっている。

ビュエルが、独立閉鎖空間として扱われてきたアメリカ文学に内在する越境の特徴を明らかにした一方で、環境文学者であるハイザは、アメリカ文化

のなかで醸成されたローカリズムに基づく環境的価値観を惑星の視座から問い直す。領土拡張と開拓の歴史を持つアメリカでは、西部への移動と環境破壊は同時に進展していった。このようなアメリカの文化的土壌で生まれた環境文学研究が、特定の場所との社会的、文化的な親密性を意味する「場所の感覚」を環境思想における重要概念として提示したことは、自然の流れであった。場所の感覚とは、特定の場所に根を下ろし、何世代にもわたって生活を営むことで養われる経験や知識を基盤とした場所との結びつきを意味する。しかし、環境意識と場所の感覚の関連はアメリカ特有の文化状況に基づくものであり、ヨーロッパでは、場所の感覚が「血と土」といった排他的な民族イデオロギーを想起させるとして、場所への関心を環境意識と結びつけることに対する警戒心が認められる (Heise 47)。ハイザは、環境問題の原因と結果は特定の地域で完結するものではないと指摘し、気候変動などの環境問題が顕在化した今日において必要となるのは、「場所の感覚」ではなく、地球規模で自然環境を捉える「惑星の感覚 (Sense of Planet)」であると主張した。ハイザの惑星の感覚は「脱領土化 (Deterritorialization)」と「エココスモポリタニズム (Eco-Cosmopolitanism)」という概念によって明確化される。脱領土化とは、科学技術やメディアの発達に起因する特定の場所との社会的文化的結びつきの喪失を意味する概念であり、この脱領土化によって、エココスモポリタニズム、すなわちこの惑星の^{ノンヒューマン}非人間を含むあらゆる存在を内包した想像的な共同体の一員としての意識を獲得することができる、と論ずる (Heise 55,61)。

アメリカ合衆国の歴史、つまり入植から始まる西漸運動というのは西洋の拡大であり、グローバリゼーションの一端と捉えられる。グローバリゼーションへの抵抗としてローカリズムを推進する「場所の感覚」が重要視されたとすれば、ハイザの「惑星の感覚」はグローバリゼーションへの反動的ローカリズムへの抵抗と言えるだろう。それは国境線を無効化し、人間社会の画一化を推し進めるグローバリズムの再強化ではなく、人間／非人間、技術／自然という様々な概念的境界を曖昧化する^{フラットな}優劣のない地球像と言える。

4. 人新世における惑星思考

環境意識におけるこのようなローカルとグローバルの二項対立構図にテレストリアルという新たな座標軸を加え、惑星に存在する人間のあり方を再定義しようとしたのが哲学者のラトゥールである。惑星という表現は用いられていないものの、ラトゥールの地球環境と人間の概念的見直しは人新世の文脈における惑星思考の議論に密接に関連するものである。

ラトゥールは、テレストリアルを大地に根ざすあらゆる存在を内包する概念として提起する。

テレストリアルは、人間行為を引き起こさせる環境でもその背景でもない。地理政治について話すとき、人々は一般的に、「地理」という接頭語を政治行為の単なる枠組みと捉えるだろう。ところが、これまでに起きた変化を見ると、「地理」がエージェントと化し社会生活の隅々にまで参加しているのである。

今日、私たちが陥っている方向感覚の喪失状態は、どう見ても、応答を返してくる人間以外のアクターの登場によって起きている。人間以外のアクターは今後も人間行為に応答し続けるだろう。近代化に向かう人々はいま見当識を失った状態にある——いまどこにいるのか、いまどの時代なのか、とくに自分たちが今後どのような役割を果たすべきなのか、まったくわからないのである。(ラトゥール 68)

結局のところ、これまでの環境意識におけるローカル／グローバルの議論は、私たちの生活スタイルの領域的スケールを問うているに過ぎなかった。いずれにせよ、地球は「人間行為を引き起こさせる環境」や「その背景」でしかなかったわけである。ラトゥールがテレストリアルという概念によって転換を試みたのは、こうした環境認識である。これまで単なる人間社会の背景と捉えられていたものを、「エージェント」、「応答を返してくる人間以外のアクター」として捉え直すということ。地球環境の行為主体性を認めることで、

政治的な影響力を持つ存在として認識するということである。さらにラトゥールはテレストリアルとローカル／グローバルの違いに子細な説明を加える。グローバルが「すべてのものを遠く離れた視点から捉える。対象が人間社会の外側にあるかのように、また対象が人間の関心事とは完全に無縁であるかのように捉える」のに対して、「テレストリアルの方は同じ対象をずっと近寄った視点で捉える。対象は私たちの共同体の内側にあって、人間行為に対し敏感に速やかに反応する」(ラトゥール 104)。そして、テレストリアルとローカルの違いは「土地への帰属の重要性、正当性、必要性」をめぐる認識の差異だと述べる。つまり、テレストリアルは「『ローカルが付け加えたもの』(すなわち民族的同質性、世襲財産、歴史主義、郷愁、非真正性の真正性 (inauthentic authenticity))」と「土地への帰属願望」を分離し、前者を容認しない立場である(ラトゥール 84-85)。これまでのローカリズムに付随する閉塞性、排他性を否定するとともに、地上の存在としてあらゆる生物や無生物、自然現象と肩を並べる存在として人間のあり方を提示し、テレストリアルとして自分の住む土地についてのどれだけ知っているのかをラトゥールは問う。それは、「場所の感覚」において議論されてきた、人間のアイデンティティ形成にかかわる文化的歴史的知識ではなく、地質学的時間や惑星規模の空間を視野に入れた科学的な知識である。

ラトゥールがテレストリアルという概念によって、政治的主体を人間だけではなく、人間以上の世界に拡大したという事実^{モアザンヒューマン}に、現代が人新世に突入しているということ(公式的な認定には至っていないが)への明確な意識が読み取れる。人新世とは、人間が地質学的脅威とされる地質年代を指す。人間の活動が地球環境に及ぼす影響が明らかとなり、地球環境の安定が政治的主题となった今日において、政治はもはや人間のことだけを考えるわけにはいなくなった。ラトゥールは、「法の保護や国家による補助がある世界」(*the world they live in*)と「生活の糧を得ている世界」(*the world they live from*)を区分し、人間は生活の糧を得るこの物理的な大地に降り立たなければならない(landing on Earth)と警鐘を鳴らす³⁾(Latour 15)。ラトゥールの主張には、地球の有限性や事物性を、実感をもって理解することの重要性が示されてい

る。これまで抽象的イメージに過ぎなかった地球像を事物として、そして行為主体として捉え直そうとするラトゥールの試みは、極めて今日的な人新世の状況を反映しているように思われる。しかし、ラトゥールは、人新世ということばが生まれる 10 年も前に発表されたミシェル・セール (Serres) の『自然契約』(*Le contrat naturel* 1990) において、すでに惑星の行為主体性(エイジェンシー)が認められていることを指摘している。セールは『自然契約』において、フランス語で時候を意味する語と天候を意味する語が同一の“temp”であることに着目し、短期的な時候(時間)で物事を思考し行動することで、天候に多大なる影響を及ぼすことへの危惧を示している(セール 46-48)。そして「われわれ人類が初めて地球全体に物理的作用を及ぼし、そして地球もおそらく人類全体に反応しているまさにこのときに、悲劇的にもわれわれは地球をなおざりにしているのだ」という一文に表されているように(セール 47)、人間活動に「反応」する行為主体として地球をいち早く認識している。

ラトゥールの「法の保護や国家による補助がある世界」と「生活の糧を得ている世界」は、歴史学者チャクラバルティの表現を用いれば、地球と惑星という概念で完全には一致せずとも矛盾なく説明することができる。チャクラバルティは“The globe, I argue, is a humanocentric construction; the planet, or the earth system, decenters the human”と述べる(Chakrabarty 4)。チャクラバルティの地球はスピヴァックと同様にグローバリゼーションに基づくものであり、西洋の拡大が作り出した地球像、そして制度やプロセスが生み出す人間中心主義的概念とされる(Chakrabarty 71-72)。一方で、惑星とは地球システムと言い換えることができるように、天文学的、地質学的な事物として議論される。チャクラバルティは、地球において重要とされるのが、持続可能性(Sustainability)であり、惑星の枠組みにおいて議論されるのは生存可能性(Habitability)だと述べる(Chakrabarty 81)。生存可能性において問題とされるは、“what makes a planet friendly to the continuous existence of complex life”であり、人間にとって生存可能性は重要である一方で、生存可能性にとって人間は重要とはされない(Chakrabarty 83)。チャクラバルティが“In contrast to the story of capitalist globalization, [the planetary] outlook lays out a perspective on

humans and other forms of life without humans being at the center of the story”と論ずるように (Chakrabarty 78)、惑星なるもの (The Planetary) は人間を脱中心化する思考枠組みを人文学に導入したのである。

チャクラバルティの議論における地球と惑星の関係もまた、スピヴァクが論ずるように単純に切り分けて考えられるものではない。しかし、スピヴァクが「[環境]や[惑星]といった概念の重要性を示唆ながら、このような問題域を真正面から論じようとしない」のに対し (山里 175)、チャクラバルティは、スピヴァクの論ずる他者性に満ちた惑星の概念を継承しつつ、人文的な惑星の問題域を文化的領域から、惑星科学の研究域にまで拡大させている。資本主義や西洋文明の拡大として認識されるグローバリゼーションの影響について、スピヴァクは文化的社会的な領域において論ずるに留めたが、チャクラバルティは 1950 年頃に始まる「大加速」(Great Acceleration) に着目し、地球の問題が惑星的領域に到達したと指摘する (Chakrabarty 85)。「大加速」とは、人新世に突入する契機となった社会経済とそれに連動する地球環境の大規模な変動である⁴⁾。大加速においては確認されている世界規模の人間活動の変化には、たとえば、海外旅行の増加、車の利用の増加、紙の消費量の増加などがある (Horn and Hannes 21)。このような世界的な人間の経済活動の活発化に反応するように、海の酸性化、二酸化炭素濃度の上昇、大洪水の発生頻度の増加といった地球環境の急激な変化が認められている (Horn and Hannes 22)。この「大加速」は、疑いようもなく、グローバリゼーションの大加速といえるだろう。グローバリゼーションの加速度的追求が惑星なるもの (The Planetary) に衝突し、人間のタイムスケールでは回復しようなない惑星的な問題を露呈したのである。惑星の問題に遭遇するに至ったもう一つの要素として、チャクラバルティは採掘資本主義 (Extractive Capitalism) に言及している (Chakrabarty 205-206)。労力という概念が人的なものから機械や人工智能に拡大されるに従い、資本主義は資源の徹底的な採掘に依存するようになった (Chakrabarty 205-206)。昨今の科学技術にレアメタルや石油が不可欠とされることなどを想像すれば明らかなように、採掘主義が惑星の構造的な内部である地球の深部 (Deep Earth) にまで及んでいる。

5. 惑星思考がもたらすスケールの問題

チャクラバルティの論ずる人間を脱中心化した惑星思考では、スピヴァク同様、惑星の他者性を認めることの必要性が指摘されている。惑星の他者性とは、スケールの問題ということもできるだろう。天文学的存在である惑星は、人間が思考したり感覚したりできるスケールをはるかに超越しており、容易には埋まらない認知的溝がある。惑星思考をめぐるスケールの問題は、時間的なもの (temporal) と空間的 (spatial)、量的なもの (quantitative) に大別することができる。

時間的スケールの問題とは、地質学的時間 (Deep Time) と人間の時間概念の間の溝である。地質学的時間は、過去だけでなく、未来にも向けられたものである。人間が二酸化炭素を加速度的に排出するのに対し、それは地殻へと還元されていくには何万年という時間がかかる (Horn and Hannes 158)。このような人新世における人類が起こした急激な変化の歴史と緩やかに変化してきた地球誕生からのこの惑星の歴史を一つの物語として語ることは容易ではない。空間的スケールの問題は、身体的な能力や大きさに関連し、人間が知覚できるものが制限されていることに起因する。すなわち、人間の知覚にとって原子や細胞は小さすぎ、大陸や惑星といったものは大きすぎることである (Horn and Hannes 144)。人間には二酸化炭素それ自体は小さすぎて目には見えないし、大量に排出された二酸化炭素によって引き起こされる環境変化は巨大すぎてはっきりと捉えることができない (Horn and Hannes 80)。

環境文学者クラーク (Clark) は、この惑星思考と人間の感覚のスケールの違いから生じる問題をスケールエフェクト (Scale Effect) という概念で論ずる。

[Scale effect] is, at a certain, indeterminate threshold, numerous human actions, insignificant in themselves (heating a house, clearing trees, flying between the continents, forest management) come together to form a new, imponderable

physical event, altering the basic ecological cycles of the planet. (Clark 72)

クラークは、カーボン・フットプリントを例にとり、個々の発生させる二酸化炭素が微々たるものであったとしても、集積することで地球環境に大きな影響力を持つものとなってしまうと指摘する (Clark 72)。上記の分類で言えば、量的な問題に属すると言える。こうしたスケールエフェクトによる問題、地質学的脅威としての、集合体としての人間が引き起こす問題を、感覚的に認識できるイメージとして描き出すことの不可能性をクラークは指摘する (Clark 73)。この問題をいかに乗り越えるかが文学に課せられた一つの重要な課題であるといえる。

6. 惑星思考の文学的挑戦

こうした惑星と人間のスケールの違いが生み出す断絶をいかにして埋めることができるか。そして、惑星として地球を想像し直すこと、すなわち惑星の他者性、事物性、有限性、行為主体性をいかにして実感的に捉え、形象化することができるか。インド人作家、アミタヴ・ゴーシュ (Ghosh) が “the climate crisis is also a crisis of culture, and thus of the imagination” と記すように (Ghosh 9)、今日の環境危機は地球環境を捉えなおすための想像力を必要としている。地球を科学的対象としての惑星として想像するとき、人間は周縁化される (Chakrabarty 67)。チャクラバルティが “[Planetary science] does not belong to an earthbound imagination” と記すように (Chakrabarty 67)、人新世においては、これまでわたしたちが人文学的な領域において扱ってきた、いわば人間を特別視してきた想像力とはまったく異なる想像力が必要とされる。惑星思考を文学的に探求することは、人間中心主義を乗り越え、環境危機の時代の地球と人間のあり方を再構築するための足場となる想像力を見出していくことにほかならない。これが惑星思考におけるもっとも重要な課題のひとつであることは間違いない。

注

- 1) スピヴァックは“Planetary”、ハイザは“Sense of Planet”、チャクラバルティは“The Planetary”という用語を用い惑星思考を論じている。ラトゥールは、本稿で論じたテレストリアルという概念だけでなく、クリティカルゾーンという概念で新たな地球像を提案している。クリティカルゾーンとは、「物理的環境と生物活動（生物圏）が濃厚な相互作用を展開する、地球表層の数キロの薄い膜」を意味し（ラトゥール 121）、Deep Earth を含まない点で、チャクラバルティの惑星の概念とは異なる。
- 2) 人類学者の Ingold は、グローブ、あるいはグローバルなものについてスピヴァックと類似する認識を示している。“we are led to think, has the order of human society wrapped itself around the face of the world. Yet that order, we know, has its roots in the history of colonialism, and the attendant voyages of (principally maritime) discovery and exploration. The image of the world as a globe is, I contend, a colonial one. It presents us with the idea of a preformed surface *waiting to be occupied*, to be colonized first by living things and later by human (usually meaning Western) civilization” (Ingold 214). と述べており、グローブをより直接的にコロニアリズムに関連したものとみている。
- 3) 日本語訳は、「地球に降り立つことへの7つの反対理由『クリティカルゾーン：地球に降り立つことの科学と政治学』序論」鈴木葉二訳『美術手帖』第72巻第1082号、美術出版社、2020年、119–130頁を参照した。
- 4) 人新世の始まりについては、諸説あり正式な見解は出されていない。McNeill と Engelke は大加速を人新世の始まりとみなす理由について以下のように説明している。“Those reasons, in brief, are, first, that since the middle-twentieth century human action (unintentionally) has become the most important factor governing crucial biogeochemical cycles, to wit, the carbon cycle, the sulfur cycle, and the nitrogen cycle. Those cycles form a large part of what is now called the “Earth system,” a set of interlocking global-scale processes. The second reason is that since the mid-twentieth century the human impact on the Earth and the biosphere, measured and judged in several different ways (some of which we will detail), has escalated (McNeill and Engelke 4).”

引用参考文献

- Bond, Lucy, et al., editors. *Planetary Memory in Contemporary American Fiction*. Routledge, 2018.
- Chakrabarty, Dipesh. *The Climate of History in a Planetary Age*. U of Chicago P, 2021.
- Clark, Timothy. *Ecocriticism on the Edge*. Bloomsbury, 2015.
- DeLoughrey, Elizabeth M. “Planetaryity: Militarized Radiations.” *Allegories of the Anthropocene*. Duke UP, 2019, pp.63–97.
- Dimock, Wai Chee. *Through Other Continents: American Literature Across Deep Time*.

- Princeton UP, 2006.
- Dimock, Wai Chee, and Lawrence Buell, editors. *Shades of the Planet: American Literature as World Literature*. Princeton UP, 2007.
- Ghosh, Amitav. *The Great Derangement: Climate Change and the Unthinkable*. U of Chicago P, 2016.
- Heise, Ursula K. *Sense of Place and Sense of Planet: The Environmental Imagination of the Global*. Oxford UP, 2008.
- Horn, Eva, and Hannes Bergthaller. *The Anthropocene: Key Issues for the Humanities*. Routledge, 2019.
- Ingold, Tim. *The Perception of the Environment: Essays on Livelihood, Dwelling and Skill*. Routledge, 2000.
- Latour, Bruno, and Peter Weibel, editors. *Critical Zones: The Science and Politics of Landing on Earth*. MIT Press, 2020.
- McNeill, John Robert, and Peter Engelke, *The Great Acceleration: An Environmental History of the Anthropocene since 1945*. Belknap Press of Harvard UP, 2014.
- Spivak, Gayatri Chakravorty. *Death of a Discipline*. Columbia UP, 2003.
- Wenzel, Jennifer. "Planet vs. Global," *English Language Notes*, vol.52, no.1, 2014, pp.19-30.
- セール、ミッシェル『自然契約』及川馥、米山親能訳、法政大学出版、1994 年。
- 巽孝之『モダニズムの惑星—英米文学思想史の修辞学』岩波書店、2013 年。
- 山里勝己「ゲーリースナイダーの『終わりなき山河』惑星文学の可能性」『環境人文学Ⅱ 他者としての自然』勉誠出版、2017 年、165–183 頁。
- ラトゥール、ブルーノ『地球に降り立つ——新気候体制を生き抜くための政治』川村久美子訳、新評論、2019 年。
- .「人新世の時代におけるエージェンシー」久保明教、小川湧司訳『現代思想』第 45 巻第 22 号、青土社、2017 年、58–75 頁。
- .「地球に降り立つことへの 7 つの反対理由」『クリティカルゾーン：地球に降り立つことの科学と政治学』序論 鈴木葉二訳『美術手帖』第 72 巻第 1082 号、美術出版社、2020 年、119–130 頁。